2019年３月発行（年３回　３，８，12月発行）通巻 126 号

子どもたちの明日

Children, Our Future

2019年３月
126号

目次

・「村の幼稚園」を見ていただきました　１頁
・「村の幼稚園」の先生　２頁
・藍染め技術の復興と地域での持続的収入向上　４頁

① 「村の幼稚園」を見ていただきました

プノンペン事務所長　チャン・スレイ

12月に幼い難民を考える会（CYR）とプノンペン事務所（CYK）の活動に日頃からご協力頂いている有志の方々のスタディツアーをお迎えしました。長年運営している保育所と最近開設した「村の幼稚園」のいくつかを選んでご案内しました。どの幼稚園も特徴がありますが、ここでは２日目に見ていただいた幼稚園の保育者について、一言。

プレクリアン村幼稚園の先生はウック・チュンリーさん、52歳、中学校卒業。子どもが二人います。ご主人はバイクタクシーの運転手です。先生は村長のアシスタント、家庭教育のコア・マザー（Core mother）、そしてリテラシークラスで読み書きができない人に教えていました。村で子どもに教育を与えたいので、「村の幼稚園」の先生になりました。プレクリアン村の幼稚園の開園前にCYKの研修会に20日間参加しましたが、開園後、国際協力NGOが支援しているロリアビア郡内の地域幼稚園の保育者研修会に３回、１回３日間（金曜日、土曜日と日曜日）参加し、毎月２回、木曜日の技術会議に参加しています。木曜日の技術会議は郡の事務所で１回、もう１回は地域幼稚園で行っています。同じ地域幼稚園の先生と交流する機会があるし、教え方の実習も良くやっているので、色々勉強できたそうです。お互いに学びあう機会があるし、子どもの指導・管理、教える準備、クラスの飾り、教材製作などを含めて勉強しましたので、自分のクラスで教えやすくなりましたと先生が言っています。幼稚園の先生になってから、子どもにも村人にも尊敬されて、委員会、特に小学校の校長先生に褒めて頂いているので、やる気がもっと出て、毎日１人で30人近い子どもを面倒見ながら、教えても、全然疲れていません。楽しく自分の仕事を続けているそうです。また午後２時～４時、月曜日から土曜日まで、ベトナムの子どもたちにクメール語を教えに行っています。ベトナムの子どもかカンボジアの子どもか考えず、村の子どもですから、教育を与えたいと思っています。地域で教育を受けている人が多ければ、良い人が多ければ、地域で良いこともあるし、地域開発にも繋がると期待しているからと先生が言いました。

ツアー参加者から感想を寄せて頂き、これからの活動の励みになりました。一部をご紹介します。

勤務先布チョッキンやＣＹＲ事務所でのボランティア

百聞は一見に如かず、カンボジアの農村、幼稚園、家庭を見ることができてよかったです。先生の熱意、仕事ぶりは皆すばらしく、頭が下がる思いでした。自分も村の幼稚園に通った経験があったり、親の勧めで教員になりはじめは嫌で工場でも働いたけど今は保育を楽しんでいたり、先生の経歴もさまざまであることを知りました。曜日別にしっかりとカリキュラムが組まれていたのには驚きました。

助成団体「特定非営利活動法人WE21ジャパン厚木」からの参加者

家庭訪問では、縫製工場に通う園児の

母親に代わり、お孫さんの面倒を見ておられるお祖母さんが近くの「村の幼稚園」に通われるお孫さんの様子を聞かせてくれました。読み書きを覚え、家に帰ると習った歌を歌い、幼稚園での出来事を話してくれる事が嬉しいと言われていました。何より、昼間面倒をみて頂きとても安心と言われたことが心に残りました。

設立時からの会員

幼稚園のカリキュラムは日替わりで、（略）、身嗜みを整えようというジェスチャー付きの歌もあり、手を洗う、髪を梳かすといった生活習慣を身に着けさせることも組み込まれている。「これが無ければ、この子たちはどのような生活を送っているのだろうか」と思う。家にいるだけでは得られない日常生活の習慣づけ、教育が行われており、以前の「農業に勤しむため子どもたちを預ける」という感覚から、「よりよい教育を受けられると嬉しい」という考えが子を持つ親の間に生まれてきているのは、大人が子どもの教育に前向きになっていると捉えていいと思われる。

雨森政恵理事

バンキアン保育所、プレイタトウ保育所、プレクリアン村の幼稚園、スダオコンラエム村の幼稚園、４つの保育所、幼稚園を訪問して、子どもたちの輝いた目、割合に礼儀正しい静かな様子に感動した。衛生面でもう少し配慮が欲しいと感じた。先生は忙しくてできないが、園内の掃除、草とり等、また、はだしでの教室の出入り等は今後改善するべき点ではないか。

② 「村の幼稚園」の先生

2018 年 12 月 11 日から 17 日にかけてカンボジアに滞在し、首都近郊の「村の幼稚園」5 ヶ所を訪れた。写真とプノンペン事務所から送られてくるレポートでしか知ることのなかった幼稚園の子どもたちと先生に会うことができ、想像していたこととさほど違わないことや、想像し得なかったことを知ることができた。

なによりも、活発な 30 人前後の子どもたちをひとりで教え、そして、遊ばせる先生の仕事は非常な重労働であると感じた。朝 7 時前から 10 時過ぎまで、気を抜く間もなく、子どもの発言や動きに応えてゆかなくてはならない。例えば、観察の授業では、反応が異なる３種類のもの（葉、紙、プラスティック）を水に投じ、その成り行きを子どもに見せながら、起きている現象を説明しつつ、どうしてそうなるかと思うか質問をし、答える子どもの回答にコメントをしながら、一方で、勝手な行動をとっている子に集中を促し、と、同時進行でいくつものことをこなす。年齢がお母さんよりお祖母ちゃんに近い先生もいる。カンボジアは年長者を敬うのが礼儀なので、子どもに接する上でマイナスではないものの、体調が悪くても、代わりの先生はいないので、休むことができないのは、重圧であろう。

また、子どもへの教え方の妙を感じ取った場面があった。クランリブの「村の幼稚園」を、当会保育アドバイザーのアルンさんに同行して訪れた時のことである。教室に入ると、先生が声を張り上げて、絵本を読み聞かせていた。子どもがおしゃべりをしたり、他のもので遊んだりしており、話に集中していなかった。先生は棒で机を叩き、子どもの注意を引き戻そうとしていたが、効果はない。子どもがガヤガヤしたまま、自由遊びの時間に突入した。先生が絵本や遊具を取りだすと、子どもたちはそれぞれに自分が好きな道具を手にして遊びだした。先生は、周りにいる子に声をかけながら、遊ぶ様子を見守る。ふと見ると、アルンさんは椅子に座り、ボールを 2，3 個、手にしている。それに気づいた子どもが、アルンさんの正面に立ち、手を差し出す。アルンさんは、同時に 2，3 人の子どもとキャッチボールを始めた。ボールの応酬に、子どもたちはどんどんヒートアップし、結局、自由遊びの時間は目一杯、ボール遊びに費やした。その間、先生の周りにいた子どもたちは、絵本からパズル、そして人形、といくつかの道具を手にとり、ひとしきり触ると次のものに手を伸ばしていた。先生は子どもを褒めたり、質問をしたり、相手をしてやりながら、飽きて置きっぱなしになった道具を片付けていた。

私は、アルンさんと先生の対象的な子どもへの接し方を見て、子どもの集中力や夢中体験は、いかに子どもの期待感を盛り上げてゆけるかにかかっていると感じた。自分から子どもにあわせた先生。かたや、アルンさんは教室のとある場所に陣取って、ボールを手に、待っていた。気づいた子どもがひとり、また、ひとりとアルンさんに近づいてゆく。キャッチボールは、一対一ではない。いくつか飛び交うボールは、自分が取りに前に出ないとキャッチできないし、投げ返せない。我先にと、子どもは駆け出してくる。ボールを取れたら嬉しいし、取れなかったら悔しい。どちらにしても、もっと！もっと！と繰り返す。思いっ切り発散した子どもたちは、続いての絵本の読み聞かせでは、おとなしく座っていた。アルンさんの読み聞かせは、静かな、小さいといってもよいくらいの声である。最初から読むのではなく、指で絵本に描いているものを指し、子どもに指しているものを目で追わせながら読み進めてゆく。時おり、子どもに質問をする。子どもが競って、答える。子どもの好奇心を上手に引き出しながら、絵本を読み終わったのである。

この様子を見て、私は「村の幼稚園」で子どもを教える全ての先生に、子どもたちの関心を上手に集めたり、場合によっては、そらしたりする保育技術が伝わったら、どれほど教えることが楽しく容易になるだろうかと思った。孤軍奮闘する先生に余裕を与えるため、クラスの時間を減らしたり、病気になった場合の代行要員を準備したりするという案もなくはない。けれども、毎日の授業を、余計な力みなしで、子どもを夢中にさせながらできたら、疲れは半減ではないだろうか。

子どもたちが帰ったあと、クランリブのウン・サヴィ先生は「子どもが話を聞いてくれない。声もかれて、何ヶ月も咳がとまらない」とうなだれていた。モニタリングの報告書を読むと、前月も同じ悩みを語っていた。それに対し、具体的なアドバイスは記録されていない。

当会では、「村の幼稚園」の保育者に、3 年間、年に 9 回の技術指導を行っている。せっかくノウハウを持っているのであるから、技術指導の効果を最大化するためには、保育アドバイザーの「伝えるちから」を磨く必要があるかもしれないと感じた。

課題めいたことを書いてしまったが、現地で見聞きした「村の幼稚園」は想像以上に充実した内容だったことに、とても安心して、今日もＣＹＲ事務所でせっせと働いている。

片山美紀（2018 年 4 月入職）

③ 藍染め技術の復興と地域での持続的収入向上

コンポンチャム州にある藍染めグループが住んでいる村は、メコン川に面した豊かな土壌のカンボジアの伝統的な家並みのみられる村です。2012 年より CYR が取り組んできた藍染技術の復興事業は、2016 年度からの第 2 期では、藍の染織技術をさらに高め、地域で継承・発展させていくために製作品の販売にも力を入れてきました。

現在は 7 名のメンバーに織りを昔やっていたというおばあちゃんも加わり、それぞれ畑仕事の合間に藍の葉を育て、自分たちで染めた糸でスカーフを織れるようになりました。

泥藍づくりは毎朝 500 キロほどの藍の葉を刈っては遠くの畑から牛車で運び、大きな容器に藍の葉を水に漬けて発酵させる大変な重労働です。家族やグループ全員が協力して 1 ヶ月近く連日休まず行った結果、今年は一人 120 キロから 600 キロの良質の泥藍が生産できました。

藍染事業をこの村で始めたきっかけになったイーおばあさんは、ポルポト時代に藍染めのクロマーを作っていた話をよくしていました。孫のタイさんは、グループの中で一番若く唯一の男性で、毎年泥藍づくりに精を出しています。「川沿いの共有地に許可をもらって藍の種をたくさん撒いたけれど、藍の葉が育ち始めた時、道路を作るために土を持ってゆかれ、泥藍の生産量が少なくなってしまったこともあった。でも今年はたくさん泥藍が作れた」と嬉しそうです。

廃れてしまった藍染めの技術を自分たちも是非習いたいと始まった事業ですが、リーダーのソポアンさんは、「日本人の専門家の方に濃紺の良質の泥藍が出来るようになった、頑張って続けてくださいと言われとても嬉しかった。メンバーが染めて織ったスカーフは、観光船で村に来る外国人に 200 枚余りを売ることができた」と。藍染め事業で年間 800 ドルの収入をという 3 年間の大きな目標は、泥藍販売額と合わせ全員が達成できました。グループはこれからも質の良い泥藍を継続して生産し、織りの技術を高め、模様のバリエーションを増やして地域の行事や観光で村を訪れる外国人にもたくさん売りたいと張り切っています。当会の技術支援は今年度で終了しますが、メンバーの活動に住民が触発されて参加者が増え、地域を巻き込んで発展していくことを願っています。

本事業には、2012 年度から 2 期 6 年間公益財団法人国際協力財団の助成を頂いております。

藍の葉を見せて泥藍づくりの話をするタイさん

藍の葉を積んで来た牛車

自分でデザインしたスカーフも織れるようになった。

CYR 情報

第18 回定時総会のお知らせ

日時　2019 年 5 月 25 日 (土)　13：30 ～（開場 13:00）
場所　聖心インターナショナルスクール(聖心女子大学内)
東京都渋谷区広尾 4 丁目 3 － 1
東京メトロ日比谷線「広尾駅」下車 4 番出口 徒歩 5 分

会費お振込み・活動へのご支援は、下記までお願いいたします。

郵便振替　00110-8-36227
三菱 UFJ 銀行　六本木支店（普通）1351747
特定非営利活動法人幼い難民を考える会

子どもたちの明日 126 号

発行日：2019 年 3 月 20 日　発行者：牛場 輝夫

特定非営利活動法人幼い難民を考える会

東京事務所（CYR）
〒110-0016　東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 2A
TEL: 03-6803-2015　FAX: 03-6803-2016
Email: info@cyr.or.jp　URL: http://www.cyr.or.jp/

プノンペン事務所（CYK）
#170, St.63, Boeung Keng Kang I, Khan Chamkarmorn, Phnom Penh, Cambodia
TEL: (+855) 23 210849　FAX: (+855) 23 210849
Email: info@cyk.org.kh
URL: http://www.caringforyoungkhmer.org/

幼い難民を考える会（CYR）は認定 NPO 法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。